全学 FD・SD 7月28日(金)13:00-16:00

＜ワークショップ＞
インクルーシブな学習環境をめざして

学長特任補佐
中川正臣・高木美嘉・栗原靖・小松悟朗

講師：
植村麻紀子（神田外語大学）
科研費 基盤研究(C) 課題番号20K00777「言語教育におけるインクルージョンを実現するための当事者駆動型言語学習環境設計」研究代表者

13:00-13:05　学長挨拶

本ワークショップの流れ

教職員は振り分けられた教室に着席したうえでＦＤ・ＳＤ開始

- 13:00-13:05　学長挨拶
- 13:05-14:15　講師紹介、本ワークショップの趣旨と説明
  小グループ(4名）でのアイスブレイク含む
- 14:15-15:45　小グループ活動、大グループ活動
- 15:45-16:00　クロージング、振り返りアンケートへの取り組み（フォーム）

本FD・SDの背景

本学は多様な背景を持つ学生が集まり、インクルーシブな学びを実現する国際大学である。その具体的の方策の一つとして、「学生のキャンパスライフの満足感に配慮し、学生中心の教育」を目指すために「アドバイザーの役割（2023年3月学生支援委員会承認）」を示している。

その中には、

●2024年度終了時までに退学率2%以下を目指すこと

●留学生、障害学生に対しては、それぞれの立場を十分に考慮し、綿密に学修支援、進路支援 等を行うこと

●本学が目指すダイバーシティとインクルージョンを進めていくための多方面からの支援を行うこと

●オフィスアワーを積極的に活用し、対面での面談を通じ、アドバイジーとの良好な関係を築くこと

などが明記されている。

そこで、教職員のグループワークを行う今回の全学FD・SDでは、何らかの知識やスキル、ノウハウなどを習得することを目指すのではなく、

●ある特性を持つ学生への理解と支援する姿勢を持つこと
●教員と職員が対話を通じて共に課題を解決していく関係性の構築
●「平均的な学生」「多数派の学生」のイメージに基づいて設計されてきた従来の学習環境の再考

を目指し、学内におけるインクルージョンに対する教員、事務職員のアウェアネスを高める

13:05-13:35（司会進行：中川、スピーカー：植村先生）大学におけるインクルージョンとケーススタディで期待されること

植村麻紀子先生

神田外語大学　外国語学部 准教授

言語教育におけるインクルージョンを実現するための当事者駆動型言語学習環境設計 研究代表者

なぜ大学にインクルージョンが求められるのか、なぜケーススタディなのか、その土台にあるものなど

これまでの研究活動

「言語教育におけるインクルージョンを考える」

http://incl4lang.html.xdomain.jp/

「インクルーシブ教育」＝「共に学ぶ」こと？

文部科学省HP

『インクルーシブ教育システム』とは、

人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的 及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と 障害のない者が共に学ぶ仕組みである」

「インクルーシブ教育」＝主流に「包摂」？

ユネスコが提唱している「インクルーシブ教育」

（特別のニーズを有する）学習者の一部がいかにして主流の教育に統合していくか、ということではなく、

教育システム全体をいかにして学習者の多様性に対応するように変容させていくかを模索する方向性である。

（黒田2007；荒川・越野2013）

「インクルーシブ教育」＝主流に「包摂」？

- ユネスコの広義な定義は、教育そのものの在り方を問うている。
- 主流からはずされやすい、排除されやすい子どもたちを含む全ての子どもたちの多様なニーズに対応することで、**全ての子どもたちの学びが最大に引き出される教育システムを構築するプロセス**である。

「言語学習環境」

- **山崎（2020）**

　現在の言語教育ではごくふつうのものとして受けとめられている、can-do能力記述文で構成された学習目標の記述が、教室内に目や耳の不自由な人、肢体の不自由な人、その他の障害のある人…がいることを想定したとたんにバリアフルな様相を見せはじめ、それらの**目標記述がいかに多数派（＝そのような障害を想定しない人々）の視点で描かれているか**が明らかになることを指摘。

　発表者らの意図する学習環境は、そのようなバリアーがない環境である。

「言語学習環境」

- 山崎（2020）

　教師が用意した学習環境が、学習者の能力を最大限に引き出すように考えられたものであっても、学習者が、その特性により、必要なリソースにアクセスできなければ、その環境は何の役にも立たない。

　素晴らしい御殿があっても、そこに入るための階段の段が高すぎたら、アクセスできる者は限られる。

「言語学習環境」

- 山崎（2020）

発表者らの意図する学習環境は、教師主体のアプローチをとらない。

先の階段の比喩でいえば、「階段を低くすればいいのだね」と教師の側が一律に準備することを最終目標とするのではなく、

「あなたはどうやって入ることを好むのか、あなたはどうすれば入れるのか」について、当事者と共に考えていこうというアプローチ。

ケーススタディの目的

- 学生の抱える困難に直面することになった**教員、事務職員の困惑と試行錯誤を語ったナラティブを、事例として提示するケース教材**を試作した。
- この事例は、ある教員のナラティブというスタイルを取るが，**その内容は、当事者のナラティブを再構成して視点を変えたもの**である。ケースの中に事務職員の考えなども入れ、FD･SD参加者の当事者性を高める。

ケーススタディの目的

- ケースを媒介に**対話と省察**を行うことをとおし、

　教育関係者に**大学や教室をインクルーシブな学習環境に変えていこうとする意識を醸成**していくことが本ケーススタディの狙いである。

本ケース教材が想定している3つのレベル

ナラティブをリソースとする教材として、ハ木（2022）では、

ミクロレベルの活動（気づく・共有する）
メゾレベルの活動（表現する・関係を作る）
マクロレベルの活動（発信する・つなげる）

に分けて、各ストーリー（日本に移住した方が実際に語った語り）について学生が話し合うことが提案されている。本ケース教材では、これを参考に、以下のような3つのレベルでケースを分析できるような問いを設定する。

本ケース教材が想定している３つのレベル

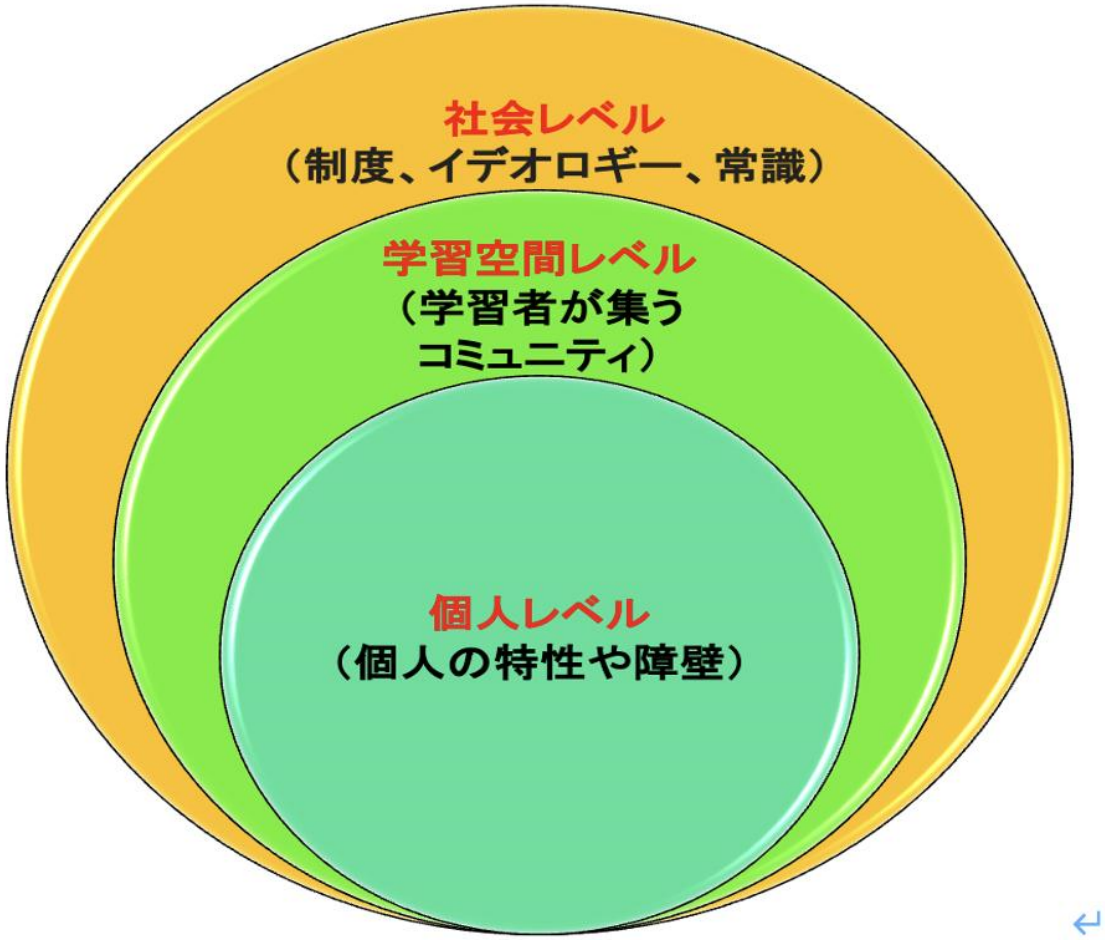

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

本ケース教材が想定している３つのレベル

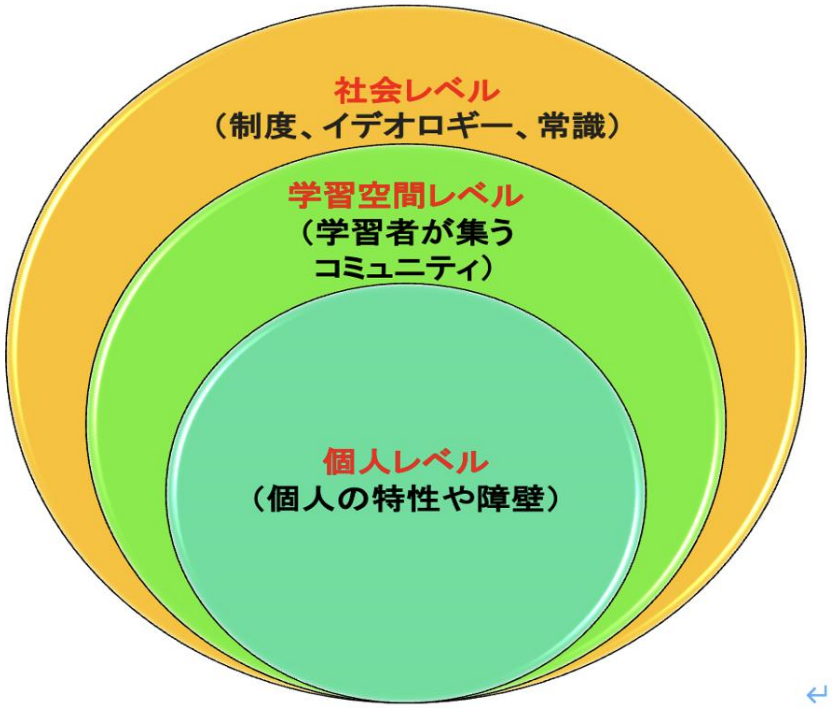

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「個人レベル 」とは、

　ある特性や障壁などに気づき、それを言語化することである。

具体的には、

このような学生は身近にいるか、どうしてこのような障壁が起きたのかを考える。

本ケース教材が想定している３つのレベル

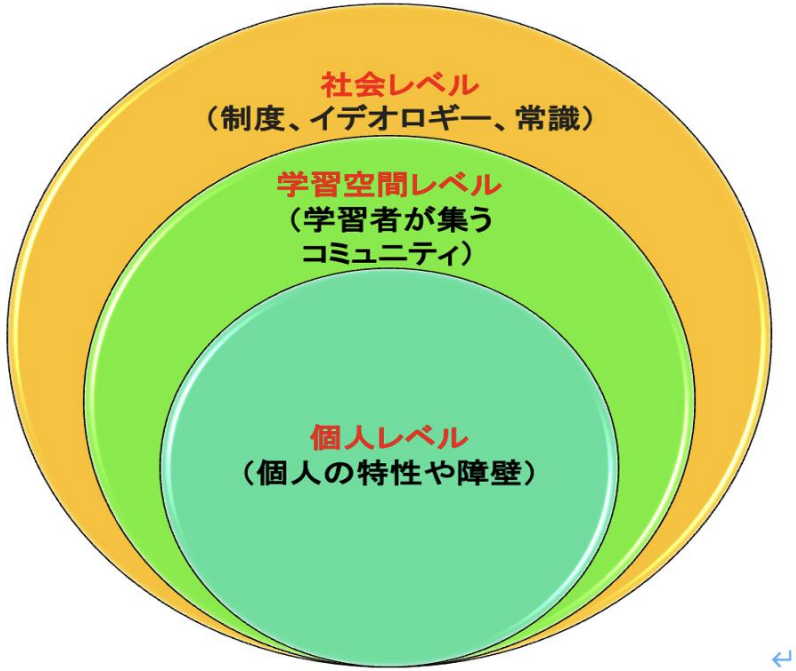

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「学習空間レベル」とは、
学生が集まるコミュニティ（例えば機関、現場）において起こる障壁を指す。具体的にはその障壁はなぜ起きるのか、学習において避けられないものなのか、個人の努力で乗り越えるべきものなのか、既存の枠には問題はないのかなどについて考える。自分が関わる教室、コースや制度、枠組みに固定観念、権力があるのか、それは変えるべきか、変えられるものかなどについても問う。

本ケース教材が想定している３つのレベル

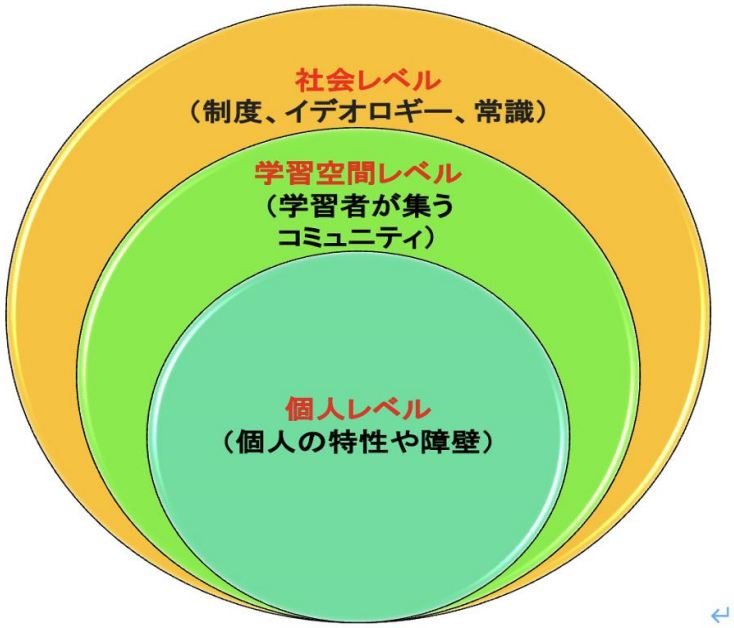

図１　本ケース教材が想定している３つのレベル

「社会レベル」とは、個人や学習空間を取り巻く制度、イデオロギー、常識などを指す。

　例えば中国語を学ぶということはどのようなイメージを持たれ、どのように評価され、どのような教育がよいとされるか、そもそも高校・大学という学校社会、教育に携わる者の社会、ひいては日本社会がどのような構造になっているかについて考える。

本ケース教材の使用を通し、期待される変化

1）教育・学習観、役割観に関する省察

―技術革新、自身の常識（これが当たり前）と批判的に向き合う。

2）想像力

―多様な学生のそれぞれ異なる背景に対する想像力を養う。

―マニュアルを求めようとしない教職員の態度を養う。

3）対話の回路

―結局、理解できない

→理解できないからこそ、対話の回路を開く。

多様な学生が大学で息ができるようになる
「暖かくなくても生ぬるい場」

同じグループの人と以下の①と②について話してみましょう。

①自己紹介してください。
②また、自分が学生時代に出会った人で、学習がうまくいかない友達について話してください。
ください。

ひとり2分以内でお話しください。

本ワークショップの流れ

教職員は振り分けられた教室に着席したうえでＦＤ・ＳＤ開始

- 13:00-13:05　学長挨拶
- 13:05-14:15　講師紹介、本ワークショップの趣旨と説明
  小グループ(4名）でのアイスブレイク含む
- 14:15-15:45　小グループ活動、大グループ活動
- 15:45-16:00　クロージング、振り返りアンケートへの取り組み（フォーム）

ワークの流れ

・ケース紹介
・ケースを読む前に、ガイド文紹介
・事例を読む
・小グループ活動
・大グループ活動

本日のケースにおける当事者の特性

※当事者のナラティブを土台にした架空の人物、フィクションを含む）

南さん：

・大学生

・注意欠如・多動症（ADHD）

・自閉スペクトラム症（ASD）

Case Study: Minami-san*

Her Profile:

- University student
- ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder)
- ASD (Autism Spectrum Disorder)

*The current case is a fiction. It is not related to actual person and group but is partly based on the narratives given by actual persons and/or events.

【ケースを読む前に】

グループで話し合ってみましょう。

①あなたは今まで友達との約束や課題の提出を忘れてしまったことがありますか。普段、あなたはスケジュール管理で工夫していることはありますか。

②いままでに、スケジュール管理に苦労している人が家族や学生、友人など、身近にいましたか。また、そのような人は、職場や大学生活やで、どのような困難に直面すると思いますか。

Before We Read the Case Study

What do you think about the following two questions?

Let's share your answers with your group members.

(1) Do you have any experiences of forgetting promises you made with your friends or missing deadlines of your assignment/homework?
Do you have any problems in managing your schedule?
If so, how do you currently try to solve them?

(2) Do you have any family members, friends or students who find it difficult to manage his/her schedule?
What kinds of problems do you imagine they will encounter in his/her school and social/work life?

【ガイド文】

発達障害の一つにADHD（注意欠如多動性障害）があります。この障がいの主な特徴として、不注意や多動性、衝動性が挙げられます。これらの特徴は、家庭教育や本人の努力とは無関係に生じるものです。さらに、不注意が原因となる物忘れによって、日常生活に支障をきたすことがあります。具体的には、友達との約束や締切りを忘れる、約束の時間に遅れる、などです。

今日、紹介する事例のように、既に診断が出ている学生の場合には、大学の学生サービス課を通じて、授業担当教員に「配慮申請」が寄せられることも増えてきました。しかし、その具体的な配慮の方法が一律的で、学生本人の支援として十分でないこともあります。

スケジュール管理の問題は大学生活、そして、ゆくゆくは社会生活でも問題になる重要な事柄です。このケースでは、学生が学習をよりスムーズに行い、より良い大学生活を送るための支援の可能性と、学生の自律を促す教職員としての葛藤について考えます。まずは教員の池谷先生の悩みを聞いてみましょう。

Preliminaries

Attention Deficit Hyperactivity Disorder, or ADHD, is known as one of the developmental disorders. The main characteristics of the disorder include inattention, hyperactivity, and impulsivity. These traits have nothing to do with how those persons are raised. They also can not be easily overcome by their own efforts.

One of the reasons of why those persons have difficult times in their dairy life is ADHD’s inattention. Because of this property, for example, they often forget promises with friends or missing some deadlines.

In the case of students who already have been diagnosed as ADHD, some universities, through their Student Services Department, start sending “Request for Consideration for Student” to instructors of classes in which those ADHD students have registered.

However, sometimes the supports from the universities do not match the symptoms those persons exhibit, and may not be sufficient for them to successfully complete the course work.

In this case study, we will discuss how we can help those students to have a better college experience. We will focus on the struggles these persons face when managing their schedule as well as those by the teachers/staffs around them. We will also discuss what the faculty members and staffs may have encounter in encouraging those students’ independence.

【ケース（池谷先生）】

私は韓国語の教師だ。私のクラスには南さんというADHD（注意欠如多動性障害）の診断を受けた学生がいる。大学からは各教員に対して、「南さんは忘れることが多いため、課題等を課す場合は、できるだけ文字で伝えてほしい」という連絡が来ている。ところが、南さんは、メモを見ることを忘れてしまうため、LMS（学習支援システム）やメールでの連絡もあまり効果がない。また、複数の課題を抱えるとパニックになってしまうため、結局、期限までに提出できないことも多い。南さんは、日常生活の中でも様々な予定を忘れるため、スマホのリマインダアプリを利用している。ある時、南さんから「リマインダを共有するアプリを使って、定期的に課題の再連絡をもらえるようにしてほしい。特定の個人だけに届けると特別扱いをしているように見えるので、クラスの全員に届けるようにしたらどうか」という提案を受けた。私は悩んだ末、リマインダアプリを導入した。リマインダアプリを導入することでクラス全体の課題提出率も向上すると考えた。しかし、問題は解決しなかった。なぜなら、南さんは、リマインダを見たとしても、すぐ課題に取り掛かれない時は忘れてしまうからである。結局、南さんは授業が終わった後、教室で課題をすることにし、私も質問があれば受け付けることにした。ただし、この方法はいつでも、誰にでもできるものではなく、私も南さんも今学期、次の時間に授業がないため可能である。また、他の教師からは「それは学生の自律学習と逆方向を向いていないか」「他の学生からもいろいろな要求が出たら対応できないくなるのでは」 という意見も出ている。正直、何が一番よいのかわからず悩んでいる。

Ikeya-sensei:

I am a Korean language teacher. In my class, there is one student called “Minami-san,” who is diagnosed as ADHD. My university has informed each faculty member that Minami-san often forgets things, so when teachers give assignments, etc., to her, teachers should also tell and show them in writing too as much as possible.

Given the information, I have started sharing notes for my lecture with her via the LMS (Learning Management System) and e-mails. Minami-san, however, even forgets to look at those notes in the first place. To make things worse, she even panics when she receives several homework at the same time, often ending up not submitting them by the due date.

For this kind of “forgetting” problem, she recalls that one of the solutions she usually takes is to set notifications and reminders in her smartphone. To do so, she comes to me and asks the following: “I would like to be able to use an app to share reminders so that I can be re-contacted regularly about assignments. If you only deliver them to certain individuals, it looks like you are giving them special treatment, so why not deliver them to everyone in the class?”

After giving it a lot of thought, I finally introduced a reminder app to the class, hoping that this may raise the submission rates of homework for the entire class as well. This attempt, however, did not work out. This is because, even when Minami-san sees a reminder, she forgets about it when she cannot immediately start working on it. We ended up with Minami-san doing her assignments in the classroom after class. I also stay in the class for her questions every time.

This solution, however, is not always available for anyone and any class. Minami-san and I may not be sometimes available after the class. In addition, some teachers show their concerns such as "Isn't that the opposite of self-directed learning for students?" or “Teachers may not be able to meet each and unique request from students if there are many.”

To be honest, I have no idea about what could be the best way to solve these kinds of problems.

ここで南さんと南さんを取り巻く人々の声に耳を傾けてみましょう。

南さん（学生本人）

小学校の時から遅刻することがよくありました。せっかく時間通りに家を出ても、忘れ物に途中で気が付いて家に取りに戻ったりして、結局遅刻してしまうのです。それでも、高校までは何とかなっていました。さすがに「何とかしなければ」と思うようになったのは、アルバイトを始めてからです。一度、バイトのシフトを間違えて無断欠勤になってしまったことがあり、店長にひどく怒られました。それから「リマインダアプリ」を活用することを始めました。これは自分でも発見でした。このアプリを使うと、「何か忘れているのではないか」という心配が減るので、日常生活を送るのが大分楽になりました。それで、中国語の北先生にも課題提出前にアプリを使って欲しいと伝えました。授業で使うことを要望したのは、他にも課題を忘れる人がいたからです。クラス全員にリマインドが送られるのなら公平だし、課題の未提出者が少なくなれば、クラス全体にとっても良いことではありませんか？

Now listen closely to Minimi-san and those around her.

Minami-san (the student herself):

I was often late for school since elementary school. Even when I leave the house on time, I sometimes realize, on my way to the school, that I left something in my room and I have to go back to pick it up, and I end up being late too. Fortunately or unfortunately, I survived junior-high and high-schools and somehow managed to go to university.

The first time I realized that something needed to be done about my trait is when I started working part-time after I entered college. I once missed my part-time shift and the manager there got terribly angry with me. Since then, I have started using a reminder app on my smartphone. This app makes it much easier for me to keep up with my daily schedule and I feel less worried about my forgetting something.

This is why I asked Ikeya-sensei, my Korean language teacher, to use a reminder app for the class. I also have an idea that the this can also help many other students who also miss the deadlines for the assignments. Wouldn't it be fair if reminders were sent to everyone in the class, and wouldn't it be better for the class as a whole (and the teacher!) if fewer assignments were not submitted?

山崎先生（池谷先生の同僚）

南さんは私の授業を履修しています。私も大学から、南さんに対する配慮申請を受け取りました。大学が要望しているのですから、課題については文字で伝えるように努めています。逆に言えば、それ以上のことはするべきではない、と考えています。南さんがスケジュール管理に苦労していることは私も知っています。最初はよく遅刻をしていたのですが、私が注意したら最近は減ってきました。南さんも自分なりに工夫しているようです。これは私の考えですが、社会生活に支障が出ないように訓練させるのも教育の一環です。大学では失敗から学生本人が様々なことを学ぶのも大事です。たとえ失敗しても、経験を積ませてそこから自分なりの工夫を引き出すことこそ、学生にとっての「学び」になるのではないでしょうか。スケジュール管理のアプリは同僚の先生方で話題になっています。学生が個人的に使うのは良いですが、授業で使うのは抵抗を覚えます。そういうツールを使って、失敗を回避させることが本当に本人のためになるかどうか、私は疑問です。

Yamazaki-sensei (a teacher and a coworker of Ikeya-sensei)

Minami-san is taking my class, too. I have also been informed, from the university, that she needs some special supports for her ADHD, and I follow the university’s instruction to let her know the assignment by writing too.

But, I believe that we should do no more than the current instruction by the university. I also have noticed that Minami-san has a hard time managing her schedule. At first, she was often late for my class too, but now she comes on time after I warned her several times. It seems she is now doing whatever she can do for her problem.

I personally find that one of the roles education plays is to train them to be socially responsible. I also have an idea that universities are the place in which students learn from their own trials and errors. Even if they sometimes fail, I believe that is THE time for them to learn. Failure is part of learning process.

Now many teachers are talking about the app Ikeya-sensei introduced to his class. I understand it is a good idea for her to use it for her own, but it may not for the entire class. I’m also concerned that taking opportunities of trial and errors out of her would be a good thing for her future or not.

古屋さん（留学をサポートする部局の事務職員）

南さんは留学を希望しており、そのサポート業務をしています。南さんの留学業務を進める上で様々な困難な点があります。メールのレスポンスが遅かったり、提出物が遅かったりするので、学科のアドバイザーの先生にご連絡をしたこともあります。留学先では今のように事務から事細かく催促されたり、確認の連絡などはなく、個人で進めなければならないことも多いです。私は、留学準備はその教育段階だと思っていたため、やや厳しい表現で彼女に連絡したこともあります。ただ、最近、南さんの学科の学科長にご相談したところ、配慮申請が出ていたことを知りました。もし、そのような事情があるのであれば事務にももっと早く知らせていただきたかったです。こういったことが関係者間でうまくシェアできればよりよいサポートができるのかもしれません。南さん自身はよい学生ですので是非、留学してほしいですが、そのためにも配慮が必要な学生へのサポートを事務内でも確立し、南さんのような学生でも留学できる体制を整えたいと思っています。

Furuya-san (a university staff who supports studying aboard)

Minami-san wishes to study abroad, and I provide her the support for styding aboard. From a couple of interactions with her so far, I find many difficulties for her to complete her applications for studying abroad. For example, I sometimes have to ask her academic advisor for her to reply my e-mails soon and submit application forms on time.

I once play strict with her because I believe she needs to be more independent and self-disciplined since Minami-san can not have the support she now has after she goes abroad. She must deal with many correspondence and documents there by herself.

Recently, I happen to learn, from a chat with the Dean of the department Minimi-san is in, that a notice for the consideration for her ADHD had been distributed over faculty members.

I’ve never heard of her difficulties before, and I should have been notified earlier by the university if she has such difficulties. Sometimes we also have some troubles sharing the information necessary to support students. I believe Minami-san is a good student and I wish her successful study abroad. And Minami-san’ case reminds me of the needs to establish appropriate supports within university for those who may need them.

【小グループ活動】

【対話１】池谷先生が「配慮申請」に対してとった行動や対処は、あなたから見て妥当だと思いますか。どうしてそのように思いますか。

【対話２】学生からの要望や学生の特性にどこまで対応すべきだと思いますか。山崎先生や古屋さんの考えに対してあなたはどう思いますか。

【対話３】時間の管理がうまくいかない人が身近にいた場合、それを自己責任論で片づけてしまうことに対し、どう思いますか。また、その背景にはどのような考え方があると思いますか。さらにこの問題はどうしたら解決に向かうと思いますか。

【大グループ活動】

小グループ活動で出た意見を簡単にシェアしたのち、以下について大グループで話し合ってみてください。

大学には南さんのようなケース以外にも様々な学生がいます。

①多様な人々が過ごしやすい大学とはどのような場でしょうか。それは現状と比べどのような違いがあるでしょうか。

②あなた自身は大学の教職員として、改善に向けて何をしていきたいと思いますか。

本ワークショップの流れ

教職員は振り分けられた教室に着席したうえでＦＤ・ＳＤ開始

- 13:00-13:05　学長挨拶
- 13:05-14:15　講師紹介、本ワークショップの趣旨と説明
  小グループ(4名）でのアイスブレイク含む
- 14:15-15:45　小グループ活動、大グループ活動
- 15:45-16:00　クロージング、振り返りアンケートへの取り組み（フォーム）

クロージング

津田英二2008「当事者性を育てる」

http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/07sympo/1-12.pdf

インクルーシヴな社会と当事者性

　私たちが社会的排除を受けている人と対等であろうとするならば、相手の世界に耳を傾け、私たちがその世界に寄り添おうとしなければならない。したがって私たちは、本人の語る言葉、さまざまな表現を尊重しようとする。**本人の意思の尊重は、支援技術ではなく、対等になろうとする努力の一環なのである。非対等性を自覚し、対等になろうと努力するということは、すなわち問題に対する当事者意識をもっているということである。**こうした意識はどのように涵養されていくのだろうか。

津田英二2008「当事者性を育てる」

複雑な現代社会の中で生活する私たちは、日々の生活を送るだけで、たいした自覚もなく加害者になっていたり被害者になっていたりする。**本来、さまざまな社会的な問題の当事者であるはずの私たちは、当事者意識を持たずに生活してしまっているのである。しかし、多くの社会的問題の解決で問われているのは、まさに私たちひとりひとりが当事者意識をもち、自覚的に解決に向けて行為していくことなのである。**

国連が「すべての人のための教育」 Education for all や「持続可能な開発のための教育」Education for Sustainable Development を政策課題と打ち出している現代は、人権や差別の問題や環境問題など、世界規模で個々人の意識覚醒が求められている時代なのである。

津田英二2008「当事者性を育てる」

まず問題と出会い、その問題を自分の問題として捉え、その問題解決のために考え、行為するという一連の過程は、当事者性が深まっていく過程である。

インクルーシヴ な社会に向かう実践の中には、この過程が内包されていなければならない。

このように考えると、インクルージョンは状態ではなく 過程として捉えられないといけないということの意味を理解できる。

インクルージョンが容易に到達できない彼岸にあるという意味もあるが、むしろ問題を素通りできるよう にしてしまうことへの警鐘という意味が含まれている。

主要参考文献

植村麻紀子・中川正臣・山崎直樹（2020）「なぜ当事者駆動型の言語学習環境設計が必要かー言語教育におけるインクルジョンの実現のためにー」『神田外語大学紀要』32 pp.377-398

植村麻紀子・中川正臣・古屋憲章・池谷尚美・山崎直樹（2022）「当事者駆動型の言語学習環境設計とは何かー言語教育におけるインクル―ジョン実現のためにー」『神田外語大学紀要』34 pp.69-87

植村麻紀子・古屋憲章・池谷尚美・中川正臣・山崎直樹（2023）「インクルーシブな言語学習環境をめざしたケース教材の開発–言語教育関係者のアウェアネスを高めるためにー」『言語文化教育研究学会 年次大会』発表資料

八木真奈美（編）（2022）『話す・考える・社会とつなぐためのリソース わたしたちのストーリー』ココ出版

本研究はJSPS 科研費 基盤研究(C) 課題番号20K00777による助成を受けたものです。